第4回 富士山女子駅伝

関西の大学が熱いッ!

打倒!立命大へ12・30壮絶!女子大生バトル

冬の大学女子駅伝№1を決める富士山女子駅伝（2016全日本大学女子選抜駅伝、サンケイスポーツなど後援）は30日、静岡県の富士市と富士宮市で開催される。昨年は立命大が3連覇を達成したが同大学に追いつき、追い越せとアツい思いで大会に臨む関西の4大学を紹介する。

▼スタート＝10時▼コース＝前県宮浅間富士宮市・富士大社前発、富士山静岡総合運動公園陸上競技場着、7区間43・8キロ▼参加＝21チーム

サンスポ キャンパスナビ

関西大

目標は8位入賞

1秒の大切さ胸に

どれだけ接戦を続けていても、僅かの差で明暗を分けるのがスポーツの世界。その怖さを思い知らされたのが関大女子駅伝チームだ。

〝事件〟は10月の全日本大学女子駅伝。終始8位を走りながらゴール直前で9位に落ち、3秒差で東洋大に敗れた。同大会で8位までに与えられる来年のシード権を逃してしまった。さぞかし落胆しているかと思われたが、武田夏実監督は「あの悔しさから1秒の重みを知ることが出来ました。1秒の大切さを、練習だけではなく日常の生活の中でも感じながら努力し、悔いの残らない準備をして大会に臨みたいと思います」と、あくまで前向き。過去は変えられないと新たな目標を設定し、チームのモチベーションを上げているようだ。

そんな武田監督の思いもあってか、主将の廣瀬亜美（4年）は一（全日本大学女子駅伝は）3秒差でシード権を逃し、悔しさだけが残りました。富士山女子駅伝では、あの悔し涙をうれし涙に変えれるよう、全員の力を合わせて総合力で入賞を狙いにいきます」と きっぱり。あくまで悔しさをバネに、さらなる飛躍を狙っている。

長丁場の駅伝では選手個々の精神力が試される。一度どん底を味わった関大メンバーは、やわなメンタルとは思えない。再びの大舞台でアッと驚かせる快走でリベンジを果たしてみせる。

悔い残さない準備できた、アッと驚かせます！

大院大

目標はトップ3

「トップに立とう!」

大阪学院大の目標は〝トップ3〟。昨年6位の成績からすれば十分可能に思えるが志水貢一監督は10月の全日本大学女子駅伝を振り返って、「流れ・リズムを作れずに力を発揮できなかった。自分たちのレースが出来ていれば3位には入れた」と、同大会の6位には悔いが残った。それでも「今大会でリベンジするという強い気持ちで取り組んでいる。〝どこかでトップに立とう!〟と個々の意識も高まってレベルアップしている。故障者もなく良い状態」と仕上がり具合には満足のようだ。

「（仙台と比べて）区間も距離も増え、アップダウンもある。体と心の両面で総合力とタフさが必要」とチームにハッパを掛けた。

そんな監督の期待を背負う選手に話を聞くと、エースの新井沙紀枝（4年）は「学生最後のレース。納得がいく、走り終わって楽しかったと思えるレースにしたい」と得意のラストスパートで有終の美を飾りたいところだ。昨年は「（どの区間で起用されても）2年連続で区間賞を取りたい」とチームに貢献する走りを誓った。地元・富士宮市出身の水口瞳（2年）は「たくさんの人が応援に来てくれるので、走りで恩返ししたい」と〝地の利〟を武器にチームを引っ張る。

それぞれの思いを胸にたすきをつなぐ女子ランナーたち。感動のラストを演出したい。

全日本大学駅伝女子駅伝のリベンジ、必ず！

京産大

目標は6位以内

挑戦する気持ちで

昨年の8位から飛躍を狙うのは京産大。関西女子駅伝界の強豪として知られる名門チームだ。今年は9月の関西学生対校女子駅伝（兵庫）で準優勝、10月の全日本大学女子駅伝（宮城）では4位に入り、11月には大学に加え、企業チームがエントリーしたFUKUIスーパーレディス駅伝（福井）でも4位と、チーム状態は好調維持しているようだ。

チームを預かる伊東輝雄監督は、「目標は6位以内。挑戦する気持ちでレースに臨みたい」とチームを引っ張るのは、1年生ながらエースの活躍をみせる橋本奈津。日本学生陸上競技個人選手権（6月・神奈川）と日本学生陸上競技対校選手権（9月・埼玉）の女子1500㍍で優勝。「駅伝ではチームを引っ張れる、いい流れを作れる存在になりたい」の言葉どおり全日本大学女子駅伝、FUKUIスーパーレディス駅伝の2大会で1区間賞を獲得した。先行・逃げ切りが〝定石〟といわれる駅伝では、スタートダッシュが何より大事。伊東監督の起用法にも注目が集まる。橋本は「今年最後の大会なので、後悔しない走りをしたいです」と控え目ながらも活躍を誓った。

スーパールーキーに刺激を受けたチーム一丸となって、師走の富士山麓を駆け抜ける。

好調、1年生エース・橋本でスタートダッシュ

関西外大

目標は8位入賞

留学でチーム成長

近年、大学女子駅伝界でメキメキと頭角を現してきているのが、創部4年目の関西外大だ。富士山女子駅伝には2年連続2度目の出場で、初出場の昨年は13位。今年は初めて4学年すべてがそろい、チーム体制が整ってきたという。

外国語大学ということで、登録選手12人中、5人が留学を経験。留学経験は語学の習得だけでなく、人間的な成長を促している。

「留学を経験した部員の成長が、チーム全体の成長にもつながっている」と山本泰明監督が話すとおり、若いチームながら、全国大会では強豪校にも臆することなく挑んでいる。

また、今年度のチーム目標は『利他の精神』。周囲に、そして仲間に配慮する駅伝を貫き、本大会では8位入賞を目指しているという。

本番を目前に控え、床呂沙紀主将（4年）が、「今のメンバーでタスキをつなぐ最後の駅伝。来年以降の次の世代につなぐ、思いの強い大会です。これまで応援してくれた方々への恩返しの走りをしたい」と、チームへの熱い思いを語れば、山本監督も「2年連続で出場できて光栄。積極的なタスキリレーをして、全国の強豪校に挑みたい」と、挑戦者の気持ちを忘れていない。

他校にはない〝独自のスタイル〟を築いてきた選手たち。昨年にも増してレベルアップした姿を見せてくれるはずだ。

体制整った、積極タスキで強豪に体当たり

富士山女子駅伝 2004年に埼玉で「全日本女子選抜駅伝競走」として行われた。07年から茨城開催となり09年を最後に休止していたが、13年から舞台を静岡に移し、「富士山女子駅伝」としてリニューアル。全日本大学女子駅伝の上位12校と、それ以外で7人の5000㍍記録が上位の6校、東西の地区学連選抜の2チームに静岡学生選抜（オープン参加）を加えた計21チームが参加する。